

八学短大 新設の介護福祉学科

比の留学生 奮闘

人手不足が深刻な介護分野において、新たな担い手として外国人労働者に期待が高まる中、八戸学院大短期大学部に今春新設された介護福祉学科にフィリピンからの留学生4人が入学した。「日本の介護を学びたい」「将来は日本の施設で働きたい」。それぞれの夢や目標を胸に、介護を取り巻く厳しい現状を肌で感じながらも、介護士を目指し日々講義や実習に奮闘している。

（三浦千尋）



日本人学生（左側）と共に介護士を目指す
勉強に励む留学生＝4月、八戸市

4人入学 「日本で就労を」「経験持ち帰る」

留学生は、アイリシユ・オバダ・ロルさん(25)、ジン・オバダ・ロルさん(23)、ボンカト・クリステイエン・メイ・レリヨソさん(22)、ジョアナ・メイ・マチアス・フェルナンデスさんの女性4人。同学科では、2年間で政治経済や社会制度といった教養科目と介護や医療的ケアなどの専門科目を学び、介護福祉士や社会福祉主事の資格取得を目指す。1期生となる本年度は10人が入学し、そのうち4人がフィリピンからの留学生だ。

聴覚障害のある親戚と暮らしたことがあるというメイさんは、介護の知識があればもっといろんなケアができるかもしれないと考えたのがきっかけ。「日本の施設で経験を積んで、いつかは学んだことをフィリピンに持ち帰りたい」と思いを強くする。アイリシユさんとジンさんも、介護が必要な家族との暮らしを通して介護職を目指すようになった。2人

は「しっかりと勉強して、日本の施設で働きたい」と意欲を示す。看護師としてフィリピンの病院で働いていたジョアナさんは、仕事を通して高齢者のケアにやりがいを感じたといい、「もっと介護の知識を深めた」と、留学を決意した。4人とも日常会話はスムーズにできるものの、専門用語が出てくると苦労することも多い。そんなときは、同級生が分かりやすく言い

換えたり、ゆっくり話したりしてサポート。4人は「クラスメートはみんな優しい。勉強は大変だけど、とても楽しく過ごしている」と充実感をにじませる。

「留学生と共に過ごすことは、日本人学生や学校側にとっても大きな刺激に。同級生の戸草内有紗さん(18)は「一緒に勉強できることは自分にとってもいい経験。海外の事例から学ぶことも多く、日本とフィリピンのお互いにいいところを取り入れることができたらしい」と話す。

「留学生の反応を見て、よりよい指導方法を探ることができ」という同学科の小川あゆみ准教授は「介護のプロフェッショナルを育てるのが学科の目標。しっかりと介護や日本文化を学び、福祉の現場で活躍してほしい」と期待を込める。

今夏には福祉施設での実習が始まり、来年度からは資格取得に向けて試験対策が忙しくなる。留学生の4人は「介護の場で必要とされる人になれるように頑張りたい」と意気込む。